

源氏物語の二首以下の「会合の歌」：独詠歌・贈答歌の見直し

著者名(日)	倉田 実
雑誌名	大妻国文
巻	43
ページ	61-79
発行年	2012-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00001274/

源氏物語の二首以下の「会合の歌」

——独詠歌・贈答歌の見直し——

倉 田 実

はじめに

『源氏物語』の和歌を、詠者の数から独詠歌・贈答歌・唱和歌の三つに分類することが根強い通説となっている。このうち、同一の場で三人以上によって詠まれた歌を唱和歌と規定することについては、前稿^①で、そもそも「唱和」という語は、二者間の贈答を意味する語であり、また、この規定では詠歌が置かれた場を見えにくくするので、適当でないことを指摘した。そして、歌が置かれた場と、当時の詠歌された実際とを斟酌して、「唱和歌」とされてきた歌は「会合の歌」とするのが妥当であることを提言した。当時の貴族たちは、儀式や行事、あるいは私的な催しであっても、その場に参集することを「会合」としていたのである。従来の「唱和歌」は、すべて公的私的を問わず「会合」での歌であった。

しかし、物語などでは「会合」の場であっても、歌が一首か二首しか置かれていない場合がある。この場合をどう把握するかが問題として残っている。結論から言えば、一首、または二首しかなくても、それを独詠歌・贈答歌とするのではなく、その場が「会合」であれば、例外もあるが、基本的に「会合の歌」と認定できることになる。公的な晴の場である

ならばなおさらである。以下、『源氏物語』における具体的な事例を取り上げて、このことを確認していくことにしたい。これは先の前稿で、示唆だけにとどめたことの別稿となる。また、逆に「会合」のような折であっても、「会合の歌」にならない場合も指摘していきたい。

なお、個々の歌に対する今日の独詠歌・贈答歌・唱和歌の通説的理解は、新編日本古典文学全集『源氏物語』第六巻に付載された鈴木日出男氏作成「源氏物語作中和歌一覧」に依ることにする。本文引用も同書に依るが、表記は一部変えた。

一 晴の場の二首しかない「会合の歌」

ここでは、晴の場と認定できる「会合」での歌を検討する。まず問題にしたいのが光源氏元服の折に詠まれた桐壺帝と左大臣の歌の扱いである。通説では贈答歌になるが、これも「会合の歌」と認定できると思われる。清涼殿で催行された元服の儀は、かなり詳細に語られているが、途中から引用する。

さぶらひにまかでたまひて、人々大御酒などまゐるほど、親王たちの御座の末に源氏着きたまへり。大臣気色ばみきこえたまふことあれど、もののつつましきほどにて、ともかくもあへしらひきこえたまはず。

御前より、内侍、宣旨うけたまはり伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御祿の物、上の命婦取りて賜ふ。白き大袿に御衣一領、例のことなり。御盃のついでに、

帝　いときなき初元結に長き世を契る心は結びこめつや

御心ばへありておどろかさせたまふ。

左大臣　結びつる心も深き元結に濃き紫の色しあせずは

と奏して、長橋よりおりて、舞踏したまふ。

左馬寮の御馬、藏人所の鷹すゑて賜はりたまふ。御階のもとに、親王たち上達部つらねて、祿ども品々に賜はりたまふ。(桐壺卷・四六〜七頁)

理髪・加冠の儀は終わり、光源氏は装束を成人用に着替えるために「さぶらひ(休み所―ここは着替え所)」に退出している。清涼殿では、その間に「大御酒などまゐる」とされて祝賀の後宴の席となり、着替えが終わって参上した光源氏は、「親王たちの御座の末」に着座している。その際に、左大臣は娘(葵の上)との結婚をほのめかしたようだが、光源氏には何の反応もなかったという。

この後宴の場で、加冠役の左大臣に桐壺帝から特別のお召しがあつて賜祿があり、「御盃」を賜っている。その際に桐壺帝から加冠役をねぎらうかのように詠歌があり、左大臣が答歌している。従来、この歌のやりとりを贈答歌として解してきたわけだが、そもそもは元服の後宴を場とした「会合の歌」と見るべきであるということが、ここで提起したい問題である。

桐壺帝の歌は、加冠役であつた左大臣が、光源氏の髻を結う際に、娘と光源氏との末長き夫婦の縁を約束する心を結びこめたかどうか、というものであつた。この縁談・結婚は、光源氏の元服に際して、葵の上が「添臥(副臥)」になるということで、あらかじめ桐壺帝と左大臣の間で取り決められていた。父親同士で、息子と娘の縁談がまともだったのである。したがって、桐壺帝の歌で結婚が取り決められたわけではない。桐壺帝の歌に対して、新全集頭注は「二人の結婚を督促する歌」としているが、厳密に言えば、左大臣に対して結婚の確認を求める歌となる。歌の下句「契る心は結びこめつや」が疑問表現となっているが、この形で確認を求めたのである。歌に続く地の文「御心ばへありておどろかさせたまふ」は、桐壺帝が、光源氏と葵の上の結婚という意向を詠んで、左大臣の不意についてはつとさせたということである。

逆に言えば、左大臣はこうした意向が歌われるとは思ってもみなかったことになる。

左大臣の歌は、深い心で結び込めた元結なので、組紐の紫の色のように、二人の縁が変わることのないように祈念しましたとなる。「紫」は、元結の紐の色であり、縁を結ぶ意が込められている。左大臣は、結婚を承諾していることを表明したことになる。

この歌は、地の文で「と奏して、長橋よりおりて、舞踏したまふ」と受けられている。歌は奏上されたのであり、「舞踏」は賜祿に対する拝舞であり、さらに御盃と御製まで賜った光栄の表現となる。

ここに明らかなのは、二人の歌は、「会合」した人々に公開されていることである。内密に贈答歌が交わされたというものではない。この場には、「親王たち、上達部」も同席しており、清涼殿で行われた桐壺帝第二御子の元服という公の場に「会合」している。「会合」の場で披露されたことになるので、そもそもは公的な「会合の歌」となる。結果的に贈答歌の装いだ、それは両者だけが享受するものではなく、あくまでも元服の後宴の席で公開されることが前提にある。

本来であれば、ここに「会合」していた「親王たち、上達部」の歌が置かれてもよかったはずである。桐壺帝から歌が詠まれたので、光源氏の元服を祝う応制の歌が続いていたことになる。しかし、物語はそれを語っていない。応制の歌は左大臣の一首のみが置かれたのである。

こうした形になったのは、元服後の光源氏と葵の上との婚姻を正式に認知・公表するものであったことと関係している。桐壺帝が、後見のない光源氏を早くに左大臣家と縁づかせたかったことは、元服年齢「十二」とも絡めて指摘⁽²⁾されている。しかし、一世源氏になったとはいえ、将来的に左大臣と光源氏の結合は、右大臣側にとって脅威となる。このことは、結婚後のこととして、「右大臣の御勢は、ものにもあらずおされたまへり」（桐壺卷・四八頁）と語られている。また、葵の上に対しては、東宮からの入内要請があったことがすでに語られていた。それは桐壺帝も知るところであろう。

光源氏と葵の上との結婚は、問題を孕むのであり、非難も多いことが予測できるのである。しかし、そうであっても桐

壺帝は、光源氏の今後を思い叡断したことになる。その叡断が、左大臣を指名する歌で、「会合」した人々に披露されたのである。また、それは東宮より要請のあった入内を、ないものとするようになる左大臣の立場を擁護するものとなる。二人の結婚は、帝の叡断であることが示されて、有無を言わせない効力を発揮するのである。

物語の展開として、左大臣に続けて応制の歌を連続させることは無意味である。物語は、元服の賀歌を「会合の歌」としてこれ以上置くことはせず、光源氏と葵の上との結婚を焦点化し、人々に認知させたことを歌でもって語ったことになる。作中の歌は、どのような場で詠まれたかが重要なのであり、二人の詠歌を贈答歌として了解するだけならば、物語の意味を見落とすことになる。ここは宴席での御製に続く応制の歌の展開となるはずが、応答・応和する歌一首だけが語られたと見るべきである。そもそものは「会合の歌」なのであり、公開されることが前提で、享受すべき人は「親王たち上達部」でもあったのである。そして、このことによって光源氏と葵の上との結婚は、反対する勢力の非難を封じ込め、公的に認知されたことになる。

*

*

*

続いては、「藤裏葉」巻、冷泉帝と朱雀院による六条院行幸に際して詠まれた、光源氏と太政大臣（昔の頭中将）、朱雀院と冷泉帝の二組の贈答歌とされている歌である。二組になっているのは確かだが、ここも「会合の歌」と認定できよう。しかし、場と隔絶して二人だけで詠み合う贈答歌が置かれる場合があるので、見ておきたい。行幸の次第も詳細に語られているが、二組の歌に関わる部分を中心に引用する。

親王たち、上達部などの御設けも、めづらしきさまに、常のことどもを変へて仕うまつらせたまへり。みな御酔になりて、暮れかかるほどに樂所の人召す。わざとの大樂にはあらず、なまめかしきほどに、殿上の童べ舞仕うまつる。

朱雀院の紅葉の賀、例の古事思し出でらる。賀皇恩といふものを奏するほどに、太政大臣の御弟子の十ばかりなる、切におもしろう舞ふ。内裏の帝、御衣脱ぎて賜ふ。太政大臣降りて舞踏したまふ。主の院、菊を折らせたまひて、青海波のをりを思し出づ。

源氏

色まさる籬の菊も折々に袖うちかけし秋を恋ふらし

大臣、そのをりは同じ舞に立ち並びきこえたまひしを、我も人にはすぐれたまへる身ながら、なほこの際はこよなかりけるほど思し知る。時雨、をり知り顔なり。

太政大臣

むらさきの雲にまがへる菊の花にごりなき世の星かとぞ見る

時こそありけれ」と聞こえたまふ。

夕風の吹き敷く紅葉のいろいろ濃き薄き、錦を敷きたる渡殿の上見えまがふ庭の面に、容貌をかしき童への、やむごとなき家の子どもなどにて、青き赤き白橡、蘇芳、葡萄染など、常のごと、例の角髪に、額ばかりのけしきを見せて、短きものどもをほのかに舞ひつつ、紅葉の蔭にかへり入るほど、日の暮るるもいと惜しげなり。楽所などおどろおどろしくはせず。上の御遊びはじまりて、書司の御琴ども召す。物の興切なるほどに、御前にみな御琴どもまゐる。宇陀の法師の変らぬ声も、朱雀院は、いとめづらしくあはれに聞こしめす。

朱雀院

秋を経て時雨ふりぬる里人もかかる紅葉の折をこそ見ね

恨めしげにぞ思したるや。帝、

冷泉帝

世の常の紅葉とや見るいにしへのためしにひける庭の錦を

と聞こえ知らせたまふ。御容貌いよいよねびととのほりたまひて、ただ一つものと見えさせたまふを、中納言さぶらひたまふが、ことごとならぬこそめざましかめれ。あてにめでたきけはひや、思ひなしに劣りまさらん、あざやかににははしきところは、添ひてさへ見ゆ。笛仕うまつりたまふ、いとおもしろし。唱歌の殿上人、御階にさぶらふ中に、

弁少將の声すぐれたり。なほさるべきにこそと見えたる御仲らひなめり。(藤裏葉卷・四六〇―一頁)

引用部の場合は六条院春の町の寝殿である。寝殿南廂には朱雀院・冷泉帝・准太上天皇六条院光源氏の三人が居並び、南簀子には太政大臣を始めとして「親王たち、上達部」が伺候していよう。御階の下の左右には殿上人たちが座していることになる。この他に、行幸なので神璽宝剣とともに多くの扈從する人々が「会合」していると見るべきである。この光景は、帝たち三人のことを除けば、『年中行事絵巻』『朝覲行幸』の構図となる。

引用冒頭部では宴席となっており、「樂所の人」が召され、南庭で舞樂が行われている。殿上童による舞で、「朱雀院の紅葉の賀」のことが「思し出でらる」とされているが、その主語は曖昧である。その場の雰囲気、懐古的になっているということであろうか。あるいは、少なくとも冷泉帝は未生なので、光源氏が想起したということであろうか。やがて「賀皇恩」が舞われている。これは「感皇恩」とも呼ばれ、左方唐樂の大食調の曲の一人舞で、唐の太宗作とも、嵯峨天皇の時代に大石峯良が作ったともされ、成立事情は未詳である。『教訓抄』に依れば、皇恩を賀ぶ心よろこを表すものと言われ、祝賀、特に太上天皇の御賀に用いられていた。「若葉上」巻の冷泉帝の命により夕霧が主催した光源氏四十の賀でも舞われている。

この選曲は、光源氏がしたのではなく、太政大臣の采配となろう。なぜなら、この舞を太政大臣の「御弟子(末子であろう)」が勤めているからである。前もって太政大臣が指定していたことになる。光源氏の意向を汲んでのこととも考えられるが、太政大臣にそんなことを漏らすのは僭越であり、光源氏にふさわしくない。太政大臣は、朱雀院だけでなく、准太上天皇光源氏に献じるつもりでいたと思われる。

この舞に対して、冷泉帝が御衣を脱いで被物としている。舞の出来を褒めるだけでなく、この曲がこの場で用いられたことに意を強くしたからだと思われる。六条院への行幸は、冷泉帝の意図として、兼年の准太上天皇算賀の意味合いを込

めていよう。⁽³⁾すでに「明けむ年四十になりたまふ。御賀の事を、朝廷よりはじめてまつりて、大きなる世のいそぎなり」(藤裏葉卷・四五四頁)とあり、その準備が始められていた。「賀皇恩」は我が意を得たことになる。

被物に対しては、太政大臣が息子に代わって拝舞している。これは童の場合は親などが代わりをする作法になるが、感極まった表現でもあろう。何よりもこの舞が自らの采配であったことを暗示している。また、「主の院」の光源氏は、菊を折らせている。この菊は、「朱雀院の紅葉の賀」の折の青海波演舞を想起させているので、太政大臣の挿頭にされたことと思われる。紅葉の賀の折に「かざしの紅葉いたう散りすぎて、顔のにはひにけおされたる心地すれば、御前なる菊を折りて、左大将(系図不明)さしかへたまふ」(紅葉賀卷・三二五)とあったからである。

そして、光源氏の詠歌となって、太政大臣が応和することとなっている。先に確認したように、この場の宴の席のありようから、二人の歌は、冷泉帝や朱雀院にも聞かれるはずである。光源氏は、この二人の帝と並んで座っているのであり、座を立てて太政大臣とだけ贈答歌を交わしたとは受け取れない。公開されることが前提としてあって、詠歌されていると見るべきである。

光源氏の歌は、直接的には菊を折らせたことが契機となっており、「色まさる籬の菊」に太政大臣に昇進した賀意を込めつつ、青海波を二人で舞った「袖うちかけし秋」を懐旧するものとなっている。一方の太政大臣は、光源氏に及ばなかった境涯を振り返り、「むらさきの雲にまがへる菊の花」を冷泉帝聖代に映える准太上天皇光源氏に例え、さらに「にぎりなき世の星」と称えている。懐旧の思いを歌には託さず、准太上天皇としての栄耀を言うわけである。このためもあり、太政大臣は末子に「賀皇恩」を舞わせるようにしたと言えよう。

両者は、互いに現在の晴れやかな地位に上ったことを称えあっている。こうした内容なので、昇進した慶びを奏上する趣を保持していることになる。「慶申」なのである。本来であれば、行幸に際して行幸の賞がされるはずである。しかし、すでに極位に昇った両者には、これ以上の賞はあり得ない。准太上天皇に上がったこと、太政大臣に昇進したことを、行

幸の賞のようにして、二人は慶申のような形で歌に詠み合ったことになる。歌は、おのずと奏上となることを前提にして、現在の相手を称え合うことで慶びを表現している。二首しかないが、「会合の歌」なのであり、他の「親王たち、上達部」にも聞かれて慶申のように機能していることになる。また、こうした形になっているので、冷泉帝と朱雀院の歌は、別に置かれることになる。

「日が暮るる」ようになって、地下の楽所の人を下げて、殿上の「上の御遊び」となっていく。そして、その場の感興に触発されるかのようにして、朱雀院の歌が詠まれている。自身を「時雨ふりぬる里人」として、このような「紅葉の折」を在位中は見ることがなかったと、心中が吐露されたのである。これは「主の院」の家を寿ぐことで、御幸の礼となるが、一方では、朱雀帝御世が聖代とはなりえなかった慚愧の思いの表出となる。「少女」巻の朱雀院行幸における憂愁の思いを含めた詠歌と同質である。⁽⁴⁾こうした朱雀帝の歌に対しては、御世の評価にかかわるだけに、それに和することは難しい。そこで、冷泉帝が、朱雀院の東宮として時めいていた「いにしへのためし」にならった庭の紅葉の錦なのですと応じて、慰藉することになる。しかし、これによっても朱雀帝御世の評価が変わるわけではない。冷泉帝の歌は、王権の帰趨を暗示しつつ、朱雀院の歌と同じように、六条院の家褒めにもなっている。また、そうであることによって、行幸における「会合の歌」と位置付けられることになる。

両者の歌は、行幸で披露された「会合の歌」なのであり、朱雀院の悲哀が磁場を孕みつつ、六条院を寿いでいることは間違いない。行幸の主役たちの感慨が披露されて、この場が納まっている。「少女」巻のように、ここに螢兵部卿宮などの詠歌も置かれていいところではあるが、そうはなっていない。これ以上に朱雀帝の御世を言上げすることは無用である。「会合の歌」は、二首で収束させるのが順当なのであった。

*

*

*

公的な場で、二首の歌が置かれた場合、それを贈答歌とだけ見るのではなく、「会合の歌」とすることで理解されることがあるということになる。しかしながら、贈答歌としておいた方が無難な例もあるように見受けられる。それは、「若菜上」巻、玉鬘が光源氏四十の賀を祝う席で詠まれた歌である。

尚侍の君も、いとよくねびまさり、ものものしき気さへ添ひて、見るかひあるさましたまへり。

玉鬘 若菜さす野辺の小松を引き連れてもとの岩根を祈る今日かな

と、せめておとなび聞こえたまふ。沈の折敷四つして、御若菜さまばかりまゐれり。御土器とりたまひて、

源氏 小松原末の齢に引かれてや野辺の若菜も年をつむべき

など聞こえかはしたまひて、上達部あまた南の廂に着きたまふ。（若菜上・五七―八頁）

歌の部分だけ引用したが、この場の説明は、「人々参りなどしたまひて、御座に出でたまふとて、尚侍の君に御対面あり。御心の中には、いにしへ思し出づることども、さまざまなりけんかし」（若菜上・五六頁）とされていた。「人々参りなどしたまひて」とは、人々が「会合」することであり、光源氏は算賀の御座に出るに先だって玉鬘と対面したことになる。玉鬘は幼子を同伴しているが、この場は二人だけと同じことになる。侍女がいたとしても、それは関係がない。

光源氏四十の賀はまだ始まっていないのであり、その前に光源氏は二人だけの対面の場を設けたのである。それは二人共に「いにしへ思し出づることども、さまざま」であったからである。しかし、算賀の日なので、玉鬘は若菜を「さまばかり」用意している。その若菜を「引く」ことによそえて、二人は現在のありようを歌で確認し合っている。二人にしか了解できないことであり、公開されることではない。だから、物語はわざわざ二人だけの席を用意したのであり、ここは晴の賀の場に先立つ、私的な対面の場なのである。

二人は贈答歌を交わすことで了解しあい、上達部たちが南廂に着いたので、光源氏は御座に出ることになる。物語は、算賀の日でありながら、その席での賀歌を置かず、二人だけの贈答歌を置いたのである。こうした折になっていることを物語は丁寧語に語っている。二人の歌は、算賀の日のものであっても「会合の歌」とはならず、贈答歌となっているのである。それは、これまでの二人の特殊な関係性に依っていることになる。

*

*

*

さらに二首しかない晴の場の「会合の歌」を見ていきたい。「幻」巻末の御仏名に際しての、光源氏と導師の歌である。

例の、宮たち上達部など、あまた参りたまへり。梅の花のわづかに気色ばみはじめてをかしきを、御遊びなどもありぬべけれど、なほ今年までは物の音もむせびぬべき心地したまへば、時によりたるもの、うち誦じなどばかりぞせさせたまふ。

まことや、導師の盃のついでに、

源氏　春までの命も知らず雪のうちに色づく梅を今日かざしてん

御返し、

導師　千代の春見るべき花と祈りおきてわが身ぞ雪とともにふりぬる

人々多く詠みおきたれど漏らしつ。(幻巻・五四九頁)

六条院の御仏名に「宮たち上達部など、あまた参りたまへり」とあるように人々が「会合」している。すでに法会は終わり、導師を引き留めてねぎらう「盃など常の作法」の場になっている。

光源氏がまず導師に盃を献じて、詠歌している。それに対して導師が応答していて贈答歌のようである。しかし、この後には「人々多く詠みおきたれど漏らしつ」との草子地あるように、宴席での引き続いた「会合の歌」が省筆されているのである。御仏名に関わる「会合の歌」が人々に詠まれていたが、最初の二首のみ語られたことになる。したがって、これは贈答歌ではなく、「会合の歌」の一部なのである。

光源氏の歌は、「春までの命も知らず」とあるように、死に行く命の哀感を漂わせている。光源氏の死はまだ先で、翌年の出家を待っただけだが、深切な心境が吐露されてしまったことになる。そこで導師は、光源氏を「千代の春見るべき花」に例え、我が身のほうが「雪とともにふりぬる」ものとしている。しかし、もはやこうした歌で慰藉される心境に光源氏はいない。出家を前にした光源氏の心境に同調することは誰にもできないのである。だから、物語は導師の歌に続いていた「会合の歌」を語ることが省いたのである。「会合の歌」でありながら二首だけを語ることによって、逆に孤愁に佇む光源氏のありようを語っていることになる。光源氏の物語はすでに終焉を迎えているのであった。

以上、光源氏四十の賀での光源氏と玉鬘の歌を除いて、四か所の贈答歌とされてきた歌を「会合の歌」と認定したことになる。いずれも晴の場、儀式・行事の場であるので、「会合の歌」とする妥当性が指摘できる。しかし、次で検討する「会合」となる道行での歌は、一律に規定することは難しいようである。節を改めたい。

二 道行の歌

登場人物たちが牛車・馬・舟などで移動する道行の途中で詠まれた歌が『源氏物語』でも散見する。これらの場合は、その認定に揺れが認められ、場合によっては独詠歌とされたり、贈答歌とされたりし、さらに二首しかない「唱和歌」と提言されたりしている。さらに具体的に見ていきたい。「会合の歌」と認められる道行での歌は、少ないようである。

最初は「須磨」巻で、須磨への出立を前に光源氏が桐壺院の山陵に詣でた途中、下賀茂神社を見渡して詠歌される場面である。

中に、かの御禊の日仮の御隨身にて仕うまつりし右近将監の蔵人、得べき冠もほど過ぎつるを、つひに御簡削られ、官もとられてはしたなければ、御供に参る中なり。賀茂の下御社を、かれと見わたすほど、ふと思ひ出でられて、下りて御馬の口を取る。

将監

ひき連れて葵かざししそのかみを思へばつらし賀茂の瑞垣

といふを、げにいかに思ふらむ、人よりけに華やかなりしものを、と思すも心苦し。君も御馬より下りたまひて、御社の方拝みたまふ。神に罷申ししたまふ。

源氏

うき世をば今ぞ別るるとどまらむ名をばただすの神にまかせて

とのたまふさま、ものめでする若き人にて、身にしみてあはれにめでたしと見たてまつる。(須磨巻・一八〇―一頁)

引用部以前に、「御供にただ五六人ばかり、下人も睦ましきかぎりして、御馬にてぞおはする」とあり、下人は措くとして数人で赴いている。光源氏の山陵参拝に数人が「会合」していることになる。そして、そのうちの一人「右近将監の蔵人」が賀茂祭の折を思い出して歌を詠んでいる。一行に聞かれているのであり、光源氏も耳にしている。そして、光源氏も詠歌しており、新全集はここを贈答歌と分類している。

道行は、日常性から離れた場になり、その一行は「会合」していると見なすことができる。しかし、その道中で歌が詠まれた場合に、どう位置付けたらいいのかが難しい。この場合もその例である。

ここは「会合の歌」とはならず、また、贈答歌でもなく、独詠歌が二首詠まれただけではないだろうか。歌の向かう方

向が、両者では著しく相違している。右近将監は、現在の悲境を思うと、目にする下賀茂神社の瑞垣まで恨めしいとしている。一方の光源氏は、その下賀茂神社の正邪を糺すという「神に罷申し」するということで詠まれている。右近将監の歌に触発されての詠歌であることは確かだが、歌語は「神（そのかみ）」が共通するだけであり、それは下賀茂神社を囑目しての詠歌であるので当然と言えよう。右近将監とは違って、光源氏は「神に罷申し」していることを重視すれば、それぞれの心境が吐露された独詠歌として了解したところである。供人の右近将監の歌に、わざわざここで光源氏が返歌するとは思えないからでもある。道行では、おのずと感慨が独詠歌として吐露される機会が多いのであり、次の例も同じである。

*

*

*

「須磨」巻では、須磨行きの道行で光源氏の歌が二首置かれて、独詠歌とされている。ここはその通りと思われるが、念のために見ておきたい。

大江殿と言ひける所は、いたう荒れて、松ばかりぞしるしなる。

源氏 唐国に名を残しける人よりも行く方知られぬ家ゐをやせむ

渚に寄る波のかつ返るを見たまひて、「うらやましくも」とうち誦じたまへるさま、さる世の古事なれど、めづらしう聞きなされ、悲しとのみ、御供の人々思へり。うちかへりみたまへるに、来し方の山は霞遙かにて、まことに三千里の外の心地するに、擢の雫もたへがたし。

源氏 故里を峰の霞は隔つれどながむる空は同じ雲居か

つらからぬものなくなむ。(須磨巻・一八六―七頁)

舟中の歌であり、『伊勢物語』の東下りを思わせる段である。舟中の限られた空間に「いと近う仕うまつり馴れたるかぎり、七八人ばかり」（須磨卷・一六三頁）が同乗している。ここも「会合」となることは確かである。また、光源氏の二首の歌は供人に聞かれている。しかし、この場合は「会合の歌」とはならず、独詠歌となろう。道行の感慨がおのずと歌になったという趣であり、「会合の歌」となる契機が語られていない。「会合の歌」となる場合は、それなりに契機が示されていると考えられる。

この点は、『源氏物語』から離れるが、『伊勢物語』東下りの段を想起すれば理解できるであろう。

三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木の蔭に下りゐて、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にすへて、旅の心を詠め」といひければ、詠める。

唐衣きつつなれにしつましあればはるきぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人、乾飯のうへに涙落してほとびにけり。（伊勢物語・九段）

東下りという道行の途中、八橋で食事休憩の折に詠まれた歌が一首だけ置かれている。これは独詠歌ではなく、「会合の歌」となる。それは「かきつばたといふ五文字を句の上にすへて、旅の心を詠め」とあるように、詠歌の契機は歌会をしようということであった。歌会は明白な「会合の歌」の場である。したがって、「皆人」も「会合の歌」として詠むはずであった。しかし、最初の詠歌が旅の悲哀を見事に折句で詠みおおせたことによつて、後が続かなかつたのである。「会合の歌」として詠まれ、二首目以降は続かなかつたことになる。これを独詠歌とするのは当を得てまい。

東下りの段では、都鳥を詠んだ歌も置かれているが、これは船頭の言によって思わず吐露された歌で「会合の歌」ではなく、独詠歌となろう。「会合の歌」となる事情は提示されていないのである。須磨行きで光源氏が詠んだ二首も都鳥の場合と同じことになる。

*

*

*

舟中での詠歌は、「玉鬘」巻で玉鬘が乳母に伴われて筑紫に下向する際にも認められる。

京の方を思ひやらるるに、返る波もうらやましく心細きに、舟子どもの荒々しき声にて、「うら悲しくも遠く来にけるかな」とうたふを聞くままに、二人さし向ひて泣きけり。

舟人もたれを恋ふとか大島のうらかなしげに声の聞こゆる

来し方も行く方もしらぬ沖に出でてあはれいづくに君を恋ふらん

鄙の別れに、おのがじし心をやりて言ひける。(玉鬘巻・九〇頁)

筑紫行きの舟には、大宰少弐・乳母・息子三人・娘二人が少なくとも同乗しており、右はそのうちの娘二人が詠んだ歌になる。新全集は贈答歌として、いずれにも「姉おもとか兵部の君」としている。

ここも「会合の歌」とはならず、また、贈答歌でもあるまい。物語はわざわざ「二人さし向ひて泣きけり」と語りつつも、「おのがじし心をやりて言ひける」とまとめている。贈答歌を意図したのではなく、「心やり」の歌なのであり、「鄙の別れ」の悲哀をそれぞれが詠んでいる。贈答歌のような対応を見せているが、地の文からすれば、独詠歌が二首併置されたことになる。

二人の娘の歌は、同乗している家族に了解可能であり、享受者となる。享受者の数から唱和歌と規定する説⁽⁵⁾ではどういうことになるのか。享受者は二人以外にもいるので、ここも「唱和歌」とするのであるのか。しかし、それは地の文が許すまい。「会合」の場で享受できる人が他にいても、こうした語りがある時は、独詠歌または贈答歌とすべきであると思われる。そして、ここは独詠歌が二首並んだのである。

なお、「胡蝶」巻の船楽の段で、秋好中宮付きの女房が舟中で詠んだ歌が四首並んでいるが、これが仮に二首であつたとしても、状況からして「会合の歌」となる。「玉鬘」巻の舟中の歌は、そうはならないということになる。

*

*

*

これまでの道行場面はいずれも「会合の歌」ではなかったが、次の例は該当するようである。また、見方によってはその範囲が微妙である。「早蕨」巻、中の君が京に上る車中の詠歌である。

御車に乗る大輔の君といふ人の言ふ、

大輔 あり経ればうれしき瀬にも逢ひけるを身をうぢ川に投げてましかば

うち笑みたるを、弁の尼の心ばへに、こよなうもあるかなと、心づきなうも見たまふ。いま一人、

女房 過ぎにしが恋しきことも忘れねど今日はたまづもゆく心かな

いづれも年経たる人々にて、みなかの御方をば、心寄せきこえためりしを、今はかく思ひあらためて言忌するも、心憂の世や、とおぼえたまへば、ものも言はれたまはず。

道のほどの、遙けくはげしき山道のありさまを見たまふにぞ、つらきにのみ思ひなされし人の御仲の通ひを、ことわりの絶え間なりけりと、すこし思し知られける。七日の月のさやかにさし出でたる影、をかしく霞みたるを見たま

ひつつ、いと遠きに、ならはず苦しければ、うちながめられて、

中君　ながむれば山より出でて行く月も世にすみわびて山にこそ入れ

さま変りて、つひにいかならむとのみ、あやふく行く末うしろめたきに、年ごろ何ごとをか思ひけんとぞ、とり返さ
まほしきや。(早蕨卷・三六二―三頁)

中の君の車に同乗する二人の女房の歌二首は贈答歌とされ、同じ車中での中の君の歌は独詠歌とされている。この二首を「唱和歌」とする説もあるが、中の君の歌を含めて考えてはいない。ここは、三首含めて私的な「会合の歌」と見ることが可能のように思えるが、微妙ではある。

最初の大輔の歌と、「いま一人」の女房の歌は、共に上京する喜びにあふれている。これ以前に、宇治にとどまることになった弁の尼が、「先に立つ涙の川に身を投げば人に遅れぬ命ならまし」(早蕨卷・三五九頁)と詠んでいたのは大きな違いである。「身を投げ」ていたならば、大君の死という悲しい目にあうこともなかったとしたのが弁の尼であった。これに対して、大輔の君は、「身をうち川に投げて」いたならば、こんなに嬉しい上京の機会は得られなかったでしょうとしている。この違いに中の君は、情けなく思っている。

「いま一人」の女房も、大君を恋しく思うことを詠み込んではいても、心は今後に向かっており、大輔の君と同じである。こうした移ろいやすい人の心に、中の君は「心憂の世」とする思いを禁じ得ない。

もしここで二人の老女房が、弁の尼と同じような趣で詠歌していたならば、中の君も続けて詠んだはずである。道行の感慨を詠み、「会合の歌」になったことであろう。しかし、二人の歌は、弁の尼とはまるで隔絶していた。だから中の君は「ものも言はれたまはず」となっている。言葉が出ないのである。本来ならば、「会合の歌」となるはずが、二首だけにとどまったことになる。

しかし、同じ車中において、景色を眺めながら物思いにふける中の君にも詠歌されている。時間が経過していて、心中吐露の歌ではあるが、二人の女房の歌があったからこそ詠歌されたのではなからうか。自分一人だけが、狭い車中に無言のままにいるわけにはいかない。時間を遅らせて、やっと中の君は「会合の歌」に加わったことになる。独詠歌のようでありながら、また、そのように認定できそうだが、道行の車中という場を問題にすれば、二人の女房の歌に続く「会合の歌」の一首と認定できるように思われる。

おわりに

二首以下しか置かれない、従来は独詠歌または贈答歌とされてきた歌を、「会合の歌」と認定してみたことになる。『伊勢物語』から一例だけ引くにとどまったが、この物語には二首以下しかない「会合の歌」が置かれた章段が多く見られる。その認定は、以上のような検討の仕方でも可能と思われるが、これ以上のことは続稿にゆだねたい。

注

- (1) 拙稿「源氏物語「唱和歌」規定の再検討―「会合の歌」の提言―」(『中古文学』88、二〇一一年一二月)
- (2) 浅尾広良「光源氏の元服―「十二歳」元服を基点とした物語の視界―」(『源氏物語の始発』竹林舎、二〇〇六年一二月)
- (3) 拙稿「(紫式部)と建築・作庭―六条院造営と六条院行幸の表現―」(高橋亨編『紫式部』と王朝文芸の表現史 森話社、二〇一二年二月)
- (4) 注(1)に同じ。
- (5) 久保木哲夫「唱和歌」(『折の文学』笠間書院、二〇〇七年一月)
- (6) 注(5)に同じ。